

烈公の家庭教育

芙蓉子

水戸烈公が千古の名主にして、其の識見の超絶な
 るは、世人の熟知せる所なるが、左の一篇は骨て
 江郎にありし頃、留守居役某に與へて、公達の
 驥方を心得させ給ひける書簡の寫なり讀み來り讀
 去り以て公が家庭教育に於ける英見達識を窺ふに
 足る、世の父兄たるもの、須らく眷々此の主義を
 服膺して可なり。

餘冷の所、其地子供等縁の間にも無障一段の
 事に候、去廿七日は余四密事大町神勢館へ行候
 よし、是よりは步行又は乗馬にて度々行候が
 宜しく、兎角子供歩行いたし候がよろしく、朝
 も未明より起き水にて顔を洗ひ薄着にて庭など
 へ出て、子供相應いたづらいたし候がよろしく
 候、風引き候へば、其の節あた、ゆり候か宜
 しく、風を引く申すべく家などとして、用心致させ
 候は以ての外に候、兎角武士の子は、手づよ

く手あらく成長致し申さず候ては、追々成長の
 上公家、武家、町人の様に成行、天下の御爲め
 を致候様に相成らず、何分にも手づよく身体
 を幼年より鍛てそだち候様いたし度候、文武共
 出精致させ候がよろしく、文武を勵ませ夫にて
 死候程の子は不惜候へば、死候ても不苦候、他
 へ養子に遣はし候ても柔弱にて文武無之者に
 ては、水戸家の外聞不宣候、誰にても一度
 は死候者故外聞不宣子供成長いたし候
 位に候は、死候方はるかに勝り申候故、表
 の附の者並びに伊勢等へも申聞候て、前文の通
 り、手あらく仕立候て、文武を勵ませ可申候、
 奥にても附の者聞候て、讀書のさらひ等は、よ
 く致させ可申候、書は文武の稽古前文申
 す如く、神勢館、又は好文亭へ歩行いたし候
 が、よろしく、子供の大人の如くに致し候は、
 身こなれあしく不宣候(中略)余四密初毎朝
 の水は、只今にてもあび候事と存候、若しあ
 び申さず候は、無理にあびせ可申候、さるか
 はり湯はつかはせ申す間敷候事。